
 < 書評論文 >

マキアヴェッリにおける歴史と「近代」

——厚見恵一郎『マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』（木鐸社、2007年）をめぐって——

川出良枝*

ルネッサンスの思想家、ニッコロ・マキアヴェッリは、政治思想研究の分野で、近年最も注目を集めている思想家の一人であるといえよう。その研究動向は多岐にわたり、思想そのものが研究の対象となるだけではなく、そのユニークな人物像にも関心が向けられ、優れた伝記研究を輩出してきた（たとえば、デ・グラツィアの『地獄のマキアヴェッリ』）。こうした伝記研究は、マキアヴェッリの生きた時代のフィレンツェの思想や文化についての歴史研究の進展と連動するものといえよう。他方、マキアヴェッリ研究においてとりわけ特徴的なことは、その思想の後世における受容への関心がきわめて高いということである。しかも、その受容には、大別して、2つの対照的な流れがある。すなわち、第1の流れとしては、キリスト教の教えや伝統的な道徳とは一線を画す、政治に固有の論理や合理性の存在を強調する国家理性論、または権謀術数の教えとしてのいわゆる「マキャヴェリズム」の起点としてマキアヴェッリを位置づけるもの、第2の流れとしては、ハリントンやルソーに典型的にみられるような、古代ローマ型の共和政体の初期近代における擁護者としてマキアヴェッリ（とりわけその『リウィウス論』）を位置づけるものである。前者についてはマイネッケの『近代史における国家理性の理念』（1957）が、後者についてはJ.G.A. Pocockの *Machiavellian Moment*（1975）が、それぞれ金字塔となる業績であったことはあらためて指摘するまでもない。

厚見恵一郎氏による『マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』は、こうした伝記・歴史研究、また受容史研究とは一線を画し、まさに正攻法ともいえるアプロ

チで、あらためてマキアヴェッリの政治思想——政治哲学といった方がより正確かもしれないが——を捉えかえそうという野心的で骨太な試みである。すなわち、本書の課題は、そもそもマキアヴェッリの思想とはいかなるものであったかをマキアヴェッリのテキストの内部において探求し、それを可能な限り合理的な統一像として示すということである。方法論においてテキスト主義に忠実であるという点を本書の特徴としてまず確認しておく必要がある。その上で付け加えるなら、以下にもみるように、本書は、受容史研究や歴史研究の成果を十分意識しながらのテキスト主義となっているということも重要である。

本書はまず序論において、マキアヴェッリの思想についての解釈の2つの傾向を紹介する。すなわち、マキアヴェッリを近代の創始者とみるか、古典的共和主義の継承者とみるか、という2つである。マキアヴェッリをその「近代」性において捉えるものとして、具体的には、レオ・シュトラウスやその影響下にあるマンズフィールドの名前が挙げられる。他方、古典古代と一定の連続性をもつ共和主義思想との関わりにおいて捉えようという流れとしては、前述のポーコック、また、それぞれ微妙に異なるものの、スキナー、ヴィローリといった論者が挙げられる。こうした整理の上、本書は基本的には前者（特にシュトラウス）の立場にたちながら、2つの潮流の最先端の学説を詳しく紹介しつつ、単純な二者択一ではなく、より統合的な解釈を試みる。

その場合の結節点が、マキアヴェッリにおける「歴史」という問題である。まず、そのいわば予備作業として、最新のルネッサンス哲学研究成果を積極的にとりいれながら、マキアヴェッリの

* 東京大学法学部教授

秩序観・運命や神の概念・人間観を明らかにした著者は(第1部 マキアヴェッリのコスモス)、続く「第2部 マキアヴェッリと歴史叙述の伝統」において本書の核心ともいえるマキアヴェッリの「歴史」意識の問題に鋭く切り込んでいく。ここでいう歴史意識とは、歴史をそこから教訓や規範をくみとるべき1つの総体、いわば「公的活動の場」とみなすという意識であり、具体的にはマキアヴェッリによって再構成されたローマの歴史(「マキアヴェッリのローマ」)がそれである。本書は、この独特な歴史意識の精緻な分析によって、マキアヴェッリの歴史観を単に近代的な歴史主義への過渡的な形態とみる見方を退け、その循環史観的要素も含めて、マキアヴェッリにとっての歴史、および歴史叙述とは何であったのかを探求していく。その上で、著者は、「マキアヴェッリの教訓的歴史叙述は、政治の規範性を担保すると同時に、その規範の歴史化・相対化への道をも開くものであった」(201頁)という評価を下す。レオ・シュトラウスの有名な「自然の歴史化」というテーゼをふまえつつ、単にそれを機械的にあてはめるのではなく、実証的な検証にも耐えうるマキアヴェッリ解釈を示そうという本書のスタンスをよく示すものであろう。

歴史意識の問題は、マキアヴェッリの認識上の特質を探るという問題にとどまるものではない。本書は続いて、マキアヴェッリがローマ史を学ぶことからいかなる教訓を得たのか、という歴史の内実についての諸問題を論じる(第3部 マキアヴェッリと「共和主義」)。ここで著者が注目するのが、マキアヴェッリにとっての「拡大的共和国」の意義である。すなわち、マキアヴェッリにとって、共和国は秩序を維持するためにはつねに外へと軍事的に拡大していかなければならない存在であり、そこにおいて拡大は、栄光の追求ではなく、破滅の回避のための手段である。こうしたマキアヴェッリの共和国観に対して、本書は、それが古典的共和国とは色合いを異にする、むしろ、同じく共和国といっても、「近代」的なそれを彷彿とさせるものではないかと示唆する。

また、マキアヴェッリが拡大的共和国におけるデモクラティックな要素、すなわち平民の欲望と勢力を重視した点についても、著者はそれが必ずしも古典古代的な政治観への復帰を意味するもの

ではないとみる。というのも、マキアヴェッリがそれを重視する理由は、まず何よりも「拡大」という統治術の観点からであって、市民の徳の涵養といった、古典的理想とは微妙に異なるからである。また、マキアヴェッリは、平民が主権を掌握する民主主義体制を求めたわけではなく、貴族との絶えざる拮抗のもとにおかれ、また創設者である「君主」を必要とする一種の混合体制のヴィジョンを描いていたという点にも注意が喚起される。

本書のみどころ、こうしたマキアヴェッリの政治思想は、「ordini と imperium の共存的拡大のための歴史的 arte」(36頁)と総括できるものである。すなわち、もっぱら『君主論』で前面に押し出される imperium (命令権・支配権)の問題と、『リウィウス論』における ordini (制度・公的制度)の問題が、別の言い方をすれば、統治術の問題と歴史的公共体論の問題が相互に複雑に錯綜しながらも、通底し補完しあっているという点に、マキアヴェッリの特質があるというのである。

長い熟成の期間を経て完成された本書の議論は多岐にわたる論点を含み、その緻密な論述には読み手を圧倒する迫力がある。『君主論』と『リウィウス論』が中心となるとはいえ、『戦術論』やとりわけ『フィレンツェ史』が本格的な分析の俎上にのせられ、まさにマキアヴェッリの全体像を描き出す試みとなっている。既存の研究の蓄積を自家筆中のものとした上で説得力のある議論を組み立てる筆者の力量には瞠目すべきものがある。その方法はきわめて堅実であり、さらなる研究の発展のための確固とした土台を提供するといえよう。ただし、そのことといわば裏表の関係になるのだが、議論の多くがマキアヴェッリについての先行研究との批判的応答によって組み立てられているため、ややもするとマキアヴェッリ自身の思想の輪郭が拡散し、マキアヴェッリを専門としない読者にとっては晦渋であるという印象を与えるかもしれない。また、arte, imperium, ordiniといった本書の解釈にとって中心的な観念がしばしば原語のままで用いられているが、もう少しマキアヴェッリや当時のイタリア語の語法にまでさかのぼって、その意味するところを厳密に検証・確定していく作業も必要だったのではなかろうか。困難を極めることを承知であえて述べれば、ヴィ

ルトゥ（virtù）という多義的な鍵概念についても、文脈に応じて適切な日本語訳が添えられていればと思う。アングロ・サクソン圏のマキアヴェッリ研究のみならず、本国イタリアでの研究動向も、もう少しまとまった形で紹介してほしかったところである。また、大部の著作であるという点で致し方ない面もあるが、引用文の不統一や外国語表記など、校正上のミスが散見される点が惜しまれる。

しかしながら、こういった指摘はこの労作を前にしては望蜀の感がある。著者は、著者に独自の解釈を示すというよりは、レオ・シュトラウスのマキアヴェッリ解釈に依拠しながら、それに一定の修正を加えるという謙虚なスタンスをとるが、本書の切り拓いた地平はそれをはるかにこえるものである。魅力的ではあるが、なかなかその実体をみきわめがたいこの複雑な政治思想家を、ある枠組みにはめ込むことでお手軽に切り取ってみせるというのではなく、その複雑な位相にどこまでも寄り添おうとする本書によって、マキアヴェッリの政治思想についてのわれわれの理解は飛躍的に豊かなものになった。

最後に、いささか外在的ではあるが、より広い政治思想史の文脈においてマキアヴェッリをどう位置づけるかという観点から、また、著者にさらなる教えを請うという観点から、的はずれであったり、理解不足である可能性は大いにあるが、あえて4つほどコメントをしていきたい。

(1) マキアヴェッリの「近代」性について

マキアヴェッリを近代の創始者として捉えたのはレオ・シュトラウス、および、シュトラウス学派の研究者だけではないであろう。実際、本書が随所で言及する佐々木毅『マキアヴェッリの政治思想』（1970）にみられるような「近代的」マキアヴェッリ像というのが、ある時期まではむしろ主流をなしていたといっても過言ではない（同書に共和主義的なモーメントについての関心が欠如しているというわけではないが）。その場合の「近代」性とは、たとえば、自己利益追求型の人間観、権力国家観、目的合理主義の貫徹、（未熟ではあっても一定程度の）科学的方法論といった側面に見いだされるのであって、こういった意味での近代性と、シュトラウスのような独特な色彩

を帯びた近代性（コスモロジーにおける近代性や、著者が強調する歴史認識における近代性）との関係がもう少し整序されていたら、近代性といったややもすれば融通無碍な概念がより厳密なものになったのではないだろうか。

(2) マキアヴェッリ自身にとっての「古代」と「近代」について

古代ローマとマキアヴェッリの生きた同時代の（その意味でモダンな）フィレンツェとを鋭く対比させる議論がマキアヴェッリにしばしばみられることは確かだが、こうした対比の射程についてはもう少し正確な理解が求められるのではないか。すなわち、マキアヴェッリにとっての「古代」と「近代」とがそれぞれ意味すること、また、両者の関係はいかなるものであったかということである。古代ローマとフィレンツェの関係については、たとえば、ブルーニは「イタリア」という包括的な観念を媒介とすることで、両者を1つの連続体とみなしていたようであるが、マキアヴェッリも同じであったのか。それとも、古代ローマとフィレンツェ（もしくはイタリア）との関係は断絶した、別のものとみなされていたのか。古代・近代という対立図式は、一般には、17世紀から18世紀にかけて鋭敏な形で表明されたものと考えられるだけに、マキアヴェッリの段階ですでにそのような認識枠組みがあったとしたら、後代とは異なるその特質はどういうものであったのか。本書に一定の言及はあるものの、さらに深く知りたいところである。本書の問題意識は、もっぱら解釈者の視点からみたマキアヴェッリの「近代」性を問うというところにあるわけだが、それとは別に、当のマキアヴェッリにとっての「近代」（ないしはそれに相当するもの）とは何であったかを問い直すことにも重要な意義がある。

(3) 共和主義の問題について

思想の中身の問題として、古典的共和主義と「近代」的共和主義という区別をすることには、難しい問題がひそんでいる。そもそも、ポーコックは、共和主義という思想の継受の歴史ではなく、ある一定の型を示す言語や言説の用いられ方の歴史を叙述しているのであって、マキアヴェッリが自分の問題関心から、古典の言語を都合良く意味

転換して用いることはむしろ当然の前提とされている。また、スキナーの場合は別の意味で微妙である。スキナーもまた、著者と同様、古典古代の題材を用いながら、マキアヴェッリが同時代の人文主義者とは大きく異なっていることを指摘し、『君主論』と『リウィウス論』とを地続きの作品として解釈している。たとえば、マキアヴェッリのテキストには、古典文献（とりわけキケロ）に対する皮肉やパロディがふんだんに用いられているところにスキナーは注目する。そもそも、大多数の人間は生まれながらにヴィルトゥの資質をもたないということを前提にして、いかにすれば、市民にヴィルトゥを注入できるかを模索したのが『リウィウス論』だというのがスキナーの解釈の特徴であろう。ポーコックやヴィローリはともかく、スキナーのこうしたマキアヴェッリ解釈は、スキナー流のやり方ではあれ、マキアヴェッリを「近代」的共和主義論として位置づけるものとなっている。この点、本書の描くマキアヴェッリとスキナーのマキアヴェッリとは意外なほど近いものではないだろうか。

(4) 拡大的共和国（ローマ）と維持型の共和国（スパルタ・ヴェネツィア）をめぐる問題について

「政治的生活は、共同体が拡大しなければ維持できない」というマキアヴェッリの認識の特異性については、本書のみごとな分析によって明らかになったといえる。しかし、発想の源のサルステイウスと同じように、マキアヴェッリも軍事的拡大は自由の喪失に向かう（拡大的共和国の没落）という冷静な認識を示しているのではないか。となると、拡大的共和国でなければ共和国は維持できない、ローマ型の共和国だけが理想であったとまで解釈できるだろうか。実際には軍事的・領土的に「拡大」しなくても、その領土を維持するということにヴィルトゥが発揮される、という風に読む可能性はないか（徹底的に防衛的な共和国の可能性）。フィレンツェやイタリア諸都市のおかれた当時の危機的な状況から考えると、その方がより穏当な提案にもみえる。

少し議論を広げるなら、マキアヴェッリの「国

家」（共和国）にとって、真に恐るべき危機とは何であったのかということにもなろう。この点については、その後の世代がマキアヴェッリをどう読んだか、ということから見直してみることも有効である。ヨーロッパの内戦を経由した国家理性論者や主権論者にとっては、内戦下のアナキーの経験が決定的なものであり、そこでは、最低限の秩序が維持できさえすれば、「自由」や「栄光」などというものは二の次であるという状況が出来た。そこにおいて、マキアヴェッリがこうした危機を打開するための知恵の宝庫として受け入れられ、積極的に取り込まれた結果、マキアヴェッリズムの主導者としてのマキアヴェッリ像が流布したといえる。しかし、著者の解釈によるマキアヴェッリの場合、守るべき「祖国」の条件（栄光と自由の実現）は案外、高く設定されているようにも思われる。栄光も自由もなくとも、最低限の秩序さえあればよい、そのための統治術とはいかなるものか、という発想は（17世紀の国家理性論者がそのように解釈したように）マキアヴェッリ本人の中に存在していたのかどうか、興味深いところである。

以上のような疑問も、堂々たる大著に触発されたがゆえの疑問である。マキアヴェッリ自身がどのような思想をもっていたのか、ということと、マキアヴェッリが後世においてどのように読まれ、解釈され、どういう形で次の世代の新たな思想にとっての触媒となったのか、ということとは、厳密に切り分けて考える必要があるが、実のところ、両者はそれほど簡単に切り離せるものではない。マキアヴェッリとは、まさにそういった歴史の重層性を体現する存在であり、本書のめざすところも、まさにその複雑な結び目の一つひとつについていかに解きほぐすところにあったといえるのではないか。

【謝 辞】

本書評を執筆するに当たって、東京大学政治理論研究会（2007年7月14日）、および早稲田大学政治思想研究会（2007年7月28日）における著者厚見氏を含む多くの参加者の活発な議論に大いに刺激をうけた。お名前を挙げることはできないが、この場を借りて謝意を表したい。